

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2006年9月

博士論文審査報告書

論文題目 戦後日本語教育学とナショナリズム
—「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理

申請者氏名 牲川 波都季

主査 細川 英雄（大学院日本語教育研究科教授）

副査 川上 郁雄（大学院日本語教育研究科教授）

副査 池上摩希子（大学院日本語教育研究科助教授）

本論文は、戦後の日本語教育史の思想史的流れをナショナリズムの視点から把握・解明しようとした論考である。その特徴は、戦後の日本語教育が「日本語＝日本人」という「日本語ナショナリズム」にいかん規定され、またそれを維持してきたかを学会誌『日本語教育』の論考を主に分析することで思想上の観点から明らかにしようという点にある。

ここでいう「思考様式言説」とは、人間の思考の様式が、言語との関係においてどのように規定されているかという問題について語られるものを指している。たとえば、「日本人としての考え方」や「日本語らしい思考」などがそれに当たる。この思考様式言説は、時代とともにさまざまな変遷が見られるが、本論文では、その言説の推移を具体的な資料の中から実証的に跡づけようとしたものである。

とくに本論文で評価できる点は、1970年代の「日本語＝日本人の思考様式」に包摂する教育が指向されたこと、それが1980年代後半からは異質性・多様性の理解・尊重の名の下に日本人と学習者を差異化する、見えない排除の原理として機能していることを具体的に実証した点である。言語と思考の関係は言語教育にとって不可避の課題であり、この問題をめぐっては、従来、さまざまな形で議論されてはきていたが、具体的な分析によって論証されたことはなかった。「思考様式言説」という限られた範囲での分析ではあるが、「日本語」と「日本人」を同一化する日本語教育の風潮の中で、この論文の論証は、きわめて先駆的な研究であると評価することができる。

このことはあわせて従来の日本語教育史批判として明確に位置づけられており、「50年代前半から60年代半ばの一時期にはナショナリズムとの関連を示していない、しかし、ここで言語と思考様式の間を厳密に検証しないままだったことが、こののちの時代に日本語ナショナリズムの復活を許容した」ことを明らかにしている。

従来の日本語教育史は、その思想上の問題を問うことを避けてきた面がある。戦後の日本語教育がそうした思想性を持たなかったこと自体が、そうした厳密な考察を欠いたことに起因することを明確に指摘するものである。

本論文の問題点としては、「思考様式言説」という点に限定して諸論考の言説を分析するという手法に限られているため、日本語教育における実際の言語教育観や言語能力観と必ずしも結びついて議論されていないことが挙げられる。この点がこの論文の弱点となって

いるともいえる。つまり、日本人に包摂しようとする日本語教育とはどのような言語教育観と言えるのか、また日本人と学習者を差異化し排除しようとする思想をもつ日本語教育とその実践はどのような言語教育観を持っているのかという点が議論されていない。

また、後半で展開される脱ナショナルな日本語教育の議論の中で、「文化リテラシー」「異文化対応能力」（異文化に対応する、第二言語としての能力）、学習者の「考えていること」を表現する能力など、「言語能力」に関わる論点や実践が述べられているが、そのような言語能力観に焦点化する議論と、論文の前半にある、戦後の日本語教育の「思考様式言説」に関わる言語能力観の関連がやや不明確である。

著者はかつて「国民国家カテゴリーの本質化を剥ぎ取る」実践を強調していたが、本論では、一人一人の学習者に寄り添いながら、「考えていること」に耳を傾けることから始めるべきだと主張する。さらに、それを「共生」のための日本語支援という実践のあり方として示唆するが、そのような実践が、本論の前半で述べた「思考様式言説」を乗り越える方法となるのか、より説得的な説明がほしいところである。

第6章において90年代後半からの「総合活動型日本語教育」を一つの到達点と見る立場をこの段階での結論としているが、この実践は、この時期に現れるさまざまな実践のなかの、ひとつの考え方に過ぎない。むしろ、こうした実践が立ち上がってくる背景を思想的な問題として世界の言語教育の大きな流れのなかで俯瞰的かつ批判的に捉えなおすことができるのではないか。この意味で、最終的に、筆者自身が「どのような日本語教育をめざすのか」という点を示しつつ、この論文の本来の目的である、これまでの日本語教育史の問い直しとして、より明確な思想的な論述が必要なのではないか。このことにより、本研究は、これからの日本語教育の新しい地平を拓く大きな可能性を展開できるであろう。

以上のような議論の不十分さはあるが、戦後の日本語教育史を批判的に考察し、さらに先端的な議論を吸収しつつ、日本語教育の持つ思想性について問題を提起した点は高く評価できる。戦後の日本語教育の問題を日本語ナショナリズムという思想上の観点から捉え、「思考様式言説」の分析によってその実証の先鞭を試みたことは、日本語教育学の博士学位論文として評価に値するものと認めることができよう。